

「盧溝橋事件」を端緒に「日中戦争」

増山雄三

私が生まれる五ヶ月前の、昭和十二年（一九三七年）七月七日夜、北京郊外に駐屯していた、豊台第八中隊が夜間演習中、盧溝橋付近で銃撃を受け、これをきっかけに起きた、日中両国の衝突は「盧溝橋事件」と呼ばれ、これが日中戦争へと繋がっていった。

日本側は、当初これを「北支事変」と称して、局地解決しよとしたが、一撃で膺懲するため増派せよという拡大論が、政府や軍部それにマスコミをリードしていき、ずるずると全面戦争へ進んでいった。

杉山陸相などは、一か月で片がつくと思っていたが、それは中國の抗戦力を見誤っていた事が分り、日本は華北派兵声明により、朝鮮や満州から送り込んだ部隊に加え、日本から増派した一個師団で、北京や天津一帯を、

一挙に制圧してしまっただのである。

しかし、そもそも日中両国は、明確な戦略的目標を持って、戦争を始めた訳ではなく、盧溝橋事件発生当時の日本は、対ソ防衛の懸念があったので、その最中に中国と戦争する事には、慎重な意見も強かった。

一方、中国側も当初は、対日防衛力強化への時間稼ぎをしようとしていて、日本との戦争を考えていた訳ではなく、盧溝橋付近で衝突が起った段階では、両軍とも事態を局地的に解決しよう、と考えていた。

それでも、即時抗戦を主張する中国共産党と、和平になお賭けていた国民党政府の蔣介石も、遂に和平は絶望的で抗戦は避けられないと表明し、折悪しく、上海で大山中尉の射殺事件が起こるや、日本は上海に続々と部隊を投入したため、遂に、交戦状態に突入し、「第二次上海事変」を起こすに至った。

こうして、事態が拡大していった要因は、日本軍と対峙していた中国の現地軍の動向も

大きかったようで、国民政府は「自衛抵抗声
明書」を発表し、中国共産党も「抗日救国十
大綱領」を提起し、これに対し日本も、戦争
宣言というべき「盧溝橋事件に関する政府声
明」を発表し、遂に全面戦争へと踏みきり、
当初は北支事変としていた呼称を、「支那事
変」と改めたのである。
他方で、ソ連は国民政府と「中ソ不可侵条
約」を結んで、武器や弾薬の援助に乗り出す
が、米英の日本に対する態度は、極めて宥和
的だったものの、この間、国共間の合作態勢
は急速に進み、華北の紅軍は国民革命軍の八
路軍に改編され、前線にも出動した。
その中で、いま、台湾が保管する蒋介石文
書や日記が、近年相次いで公開され、日中戦
争の研究に役立つているが、特に、蒋介石が
軍隊を動かすために出した、電報や受け取っ
た文書が、ほぼ全て残されている事だ。
それらの史料の解読が進むにつれ、中国側
の動向が明らかになり、例えば、宋哲元が率

いた現地軍である、第二十九軍の動きが分つてきて、宋と蒋介石との信頼関係は強固ではなく、盧溝橋事件でも、宋は日本に対抗するための援軍を、蒋介石が送ってくるかどうかの確信が持てず、日本との和平を天秤にかけつつ、状況を見守っていたようだ。

第二十九軍の高官の中でも、事態不拡大のために、日本との交渉を主張する者と、強硬に抗日を主張する者とに分れ、一貫した方針に立てる事が難しい状態で、しかも、前線の部隊は抗日意識が強く、小規模の攻撃を、繰り返し行っていた状況にあった。

その背景には、日本が華北地方への勢力拡大を図るため行なった、華北分離工作以降、華北の民衆全体に敵愾心が高まっていった、それが、全国的な抗日意識に繋がっていったのではないか、と思はれる。

ところで、当時、日本の近衛文麿内閣は、軍部の圧力に屈して、当初の戦争不拡大方針を変更し、兵力を増派して戦線を拡大してい

つたが、それは、武力で制圧すれば、中国は屈服するという見方が強かったからだ。日中が全面戦争となった、第二次上海事変についても、日本側が一方的に攻撃を仕掛けた、という見方は近年、学術レベルでは改められていて、それは、蒋介石は上海での戦闘に積極的で、日本と戦うため、精鋭部隊を上海に動員し、決戦に備えていたのだ。蒋介石の狙いは、日本軍の手薄な上海で、速戦即決で勝利した上で、好条件で日本側と講和しようとする目論んでいたため、日本軍はこの緒戦で、苦戦を強いられる事になった。それでも、その後、日本軍の増援が到着すると、中国軍は徐々に後退を迫られ、南京へ退却する事になるが、従来は、中国側は止むにやまれず抗戦したという、受動的なものだったと言われているが、実は、中国の戦略的な取組に、日本は翻弄されていたのだ。その後、日本側も戦いを継続したため、戦線はだんだん拡大し、日本は戦争の目的だけ

でなく、終結構想も持っていないなかったため、新しい事態が発生するたびに、常に場当たり的な、対症療法的対応を行なうだけで、その上、かねてより中国を蔑視していた事もあって、こうした、泥沼にはまり込んむような、戦争になっっていたと思はれる。

一方、こうした日中戦争の勃発について、中国近現代史研究家の広中一成氏は、太平洋戦争が始まった一九四一年以降を、「後期日中戦争」と位置付け分析している。

その分析によれば、太平洋戦争が始まってくるのと、中国戦線は、太平洋地域に拡大していった戦線の一角になり、この戦線の拡大に伴って、中国大陸にいた陸軍部隊が、南方に引き抜かれて行ったことで、日中戦争が太平洋戦争での戦局変化に、大きく引っ張られていった、と分析結果を紹介している。

中でも、太平洋戦争で始まった、香港攻略を支援するため、四一年十二月から翌年一月まで行われた、第二次長沙作戦で、日本軍は

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|-------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|-----------|---------------------|----------------------|----------------------|------------------|---------|
| 大敗北を蒙って「負け戦」となってしまい、 | 数多くの死傷者を出すことになった。 | また、日本本土空襲を阻止するため、敵の | 航空基地の占領などを目的に、戦争末期に実 | 施されたのが、「大陸打通作戦」というもの | で、それによって、基地は占領できたが、十 | 分な補給のない状態で戦いを強いられた。 | これもまた、多くの死傷者を出したが、広 | 中氏が言うのは、「これらの戦いなども、十 | 分に明らかにされてこなかった。それでも、 | 日中戦争史の空白部分を、ある程度埋める事 | が出来た。そして、双方に多くの被害を与え | た、日中戦争だったといっても、アジア太平 | 洋戦争は、よく検証しなければならぬもの | だ」と述べている。 | 私も、小学三年生だった、昭和二十年（一 | 九四五年）八月一日の深夜、中国から水戸へ | 飛来した、B二十九による焼夷弾空襲で、逃 | 惑ったことを忘れる事はできない。 | 令和三年十一月 |
|----------------------|-------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|-----------|---------------------|----------------------|----------------------|------------------|---------|